



都一中氏

連合駿台会報

No.348 令和元年11月15日発行
発行・編集 連合駿台会

発行人 広報委員長・齋藤柳光
編集人 事務局・矢嶋まゆ子
〒101-0052 千代田区神田小川町三十二
明治大学「紫紺館」内
電話 (〇三) 三二九六一四七四七
印刷 有限会社 美創

連合駿台会九月份例会

「音楽で感じる日本の文化」

一中節第十二世宗家 都一中氏

連合駿台会令和元年九月份例会を、九月十八日(水)十七時四十五分より、明治大学「紫紺館」三階会議室で、都一中氏をゲストスピーカーとして開催しました。

開会に先立ち、田村駿会長から次のような挨拶がありました(挨拶主旨)。

去る七月二十八日、明治大学校友会・二〇一九年度定時代議員総会が開催され、副会長の北野大先生が新しい会長に選ばれた。北野先生、十年間の長きにわたって会長を務められた向殿政男先生、そして私はともに昭和四十(一九六五)年卒業の同期生でもある。これも何かのご縁かと思ひ、連合駿台会と校友会がもっと緊密に提携・連携していきたいと模索しているところである。

また、今回「明治大学広報十一月一日号」

四ページに、連合駿台会の広告が掲載されている。これは昨年、大学支援のあり方検討委員会からいただいた答申にのっとり、暫時進めてきた事業の一つである。大学の広報紙に大学本体以外の広告が掲載されることは初めてという画期的なことであり、広報委員長の齋藤さんをはじめ広報委員の皆さま、大学の飯田理事・鈴木理事ら関係者の方々のご尽力に深く感謝申し上げます。明治大学広報は、通常は四万部弱の発行部数だが、九月号と一月号は特別号ということで三十四万部発行されており、それが全国の校友に流れている。今後も、隔月(奇数月)にイベント等の広告を掲載することで、連合駿台会の存在価値、あるいは知名度を大きくPRしていければいいと思っている。

当日の講演の主旨は以下の通りです。

日本人は五音階と二拍子の民族

※一中節の『猩猩』の演奏から始まる。

まず明治大学との関係で言うと、古賀政男先生の音楽は、三味線音楽と深い繋がりがあある。三味線音楽は古いものだと思われがちだが、三味線の音階自体は現代に繋がるものがある。西洋音楽だとメジャー・スケール・マイナー・スケール、日本語だと長調・短調というが、では長調と短調の違いはどこにあるの

か？ それは三番目と七番目の音が半音低い、つまり二番目と三番目の音、六番目と七番目の音の音程（音の幅）が狭いのが短調である。

西洋の音階は七音（ななおん）音階Ⅱ一オクターブ、これはピタゴラスが紀元前六世紀頃に考えた「ピタゴラス音律」（音階のすべての音と音程を周波数比三対二の純正な完全五度の連続から導出する音律）に由来する。一オクターブというのは、周波数が倍になることであり、西洋音楽で使用されている一オクターブという言い方は、八番目の音を表し、これは古代ギリシャでは、オクトは「八」を意味するからである。たとえば、タコはオクトパスだし、オクトーバーも当初は八月だった。

では、日本の音階はというと、五音音階（ペンタトニック）が主流で、これは六番目で一オクターブ、つまり周波数が倍になって、四種類ある（厳密に言えば三種類というほうが正しいかもしれないが……）。

中でも民謡音階は一番古くから日本人に培われてきたものだが、この各音の音程関係を西洋音楽の長音階と合わせると、陽音階はミ・ソ・ラ・シ・レ、陰音階になると、その基本形はミ・ファ・ラ・シ・ドになる。陽音階は特に民謡やわらべ歌などに多く見られる。

それが聖武天皇の時代、大陸から雅楽が入ってきて少し変わった。「四七（よな）抜き音階」とも表され、この長音階を西洋音楽の長音階に当てはめるときに主音（ド）から四つ目のファと、七つ目のシがない音階（ド・レ・ミ・ソ・ラ）のことである。この音階はその後平安時代末期にかけて大流行し、これを一番好んだ方が後白河法皇だった。彼が編纂した『梁塵秘抄（りょうじんひしょう）』の今様（今風、現代的という意味で、流行歌のこと）はこの律音階でできている。また現代においても『君が代』はまさにこの律音階で構成され、ややオフィシャルな感がある。

ここでちょっとそれて、古賀政男先生のお話をしよう。冒頭でも少し述べたが、『悲しい酒』は、純粹三味線音楽である。ただしリズムは三拍子で、これは日本の音楽には本能的にはないので、古賀先生は半島で育ちになったので、言い換えればこれは、半島三拍子であり、その要素が『影を慕いて』や、後には遠藤実先生の『星影のワルツ』などに取り入れられ、それが逆に日本人にとっては新鮮に映った。

日本人は基本的には二拍子系民族である。三拍子は馬に乗る騎馬民族のリズムであり、ウイーンフィルのニューイヤークンサートを観ていると、途中で乗馬のシーンが出てくる

が、それは上下動があるからだ。朝鮮人も騎馬民族なので、三拍子系になった。ところが日本人は、日常的に馬に乗る民族ではなく、農耕民族なので、足をあげない「摺り足」になって二拍子になる。

古賀先生が作られた『芸者ワルツ』は当然ながら三拍子の曲だが、「あなたのリードで 島田もゆれる……」に合わせている周りの人の手拍子は二拍子なのだ。三拍子の曲に二拍子で合わせるとは、日本人は音楽的リズムの天才かもしれない（笑）。基本的には三拍子で手拍子を打つことはない。お経の「南無妙法蓮華経」は三拍子では？ と思われるかもしれないが、これは厳密に言えば、強弱がないので一拍子である。日本人のリズム感にはこの強弱感がないのに対し、西洋のリズムには必ず強拍と弱拍があるが、これは言語に由来しているといわれる。

さらに加えると琉球音階が入り、主に沖縄の音楽で用いられる伝統音階である。洋楽のド・ミ・ファ・ソ・シの五音からなる音階で、どこことなく南国感が漂う。

音楽とは、稽古して習うもの

最初に演奏した『猩猩』、これは古典書物に記された架空の動物で、能の演目である五番目物の曲名『猩猩』が有名である。

能のあらすじは以下のとおり。

むかし、潯陽江（揚子江）の傍らにある

金山に、親孝行者の高風こうふうという男が住んでいた。高風は市場で酒を売れば多くの富を得るだろうという、神妙な夢を見てお告げに従い市場で酒を売り始める。酒売りは順調に進んだが、毎日高風の店に買いに来る客の中に、いくら飲んでも顔色が変わらず、酒に酔う様子がない者がいた。不思議に思った高風が名前を尋ねると、自分は猩猩と言う海中に住む者だと答えて立ち去る。そこで高風は美しい月夜の晩、川辺で酒を用意し猩猩を待つていると、水中の波間より猩猩が現れる。共に酒を酌み交わし、舞を舞い踊りやがて猩猩は高風の徳を褒め、泉のように尽きる事のない酒壺を与えて帰ってゆくのであった。

★一中節の『猩猩』の歌詞は下記の通りだ。

これは唐かねきん山の麓 揚子の里に高風と申す民にて候

扱も我親に孝あるにより ある夜不思議の夢を見る

揚子の市に出でて酒を売るならば 富貴かっきの身となるべしと

教えのままになすわざの 時去り時来りけるにや 次第次第に富貴の身となりて候 思ふ事もなく又慮る事もなくして その 楽しみとうとうたり 忽然として酔いこじとして醒め 百般の憂いを忘れて千年の齡を延ぶ

またここに不思議なる事の候 市毎に来り

酒を飲む者の候が 盃の数は重なれども面色は さらに変わらず候程に あまりに不思議に存じ 名を尋ねて候えば海中に住む猩猩とかや申し候ほどに 今日溇陽の江に出でて かの猩猩を待たばやと存じ候溇陽のほとりにて菊を湛えて夜もすがら月のまえにも友待つや また傾くる盃の影をたたえて待ち居たり 影をたたえて待ち居たり

みきときく名もことわりや秋風の 吹けども吹けども更に身には寒からじ

ことわりや白菊の ことわりや白菊の 着せ綿を温めて酒をいざや汲もうよ

まれ人もごらんずらん 月星は隈もなし 所は溇陽の江の内の酒盛り

猩猩舞を舞おうよ 葦の葉の笛を吹き 波の鼓のどうと打ち 声澄み渡る浦風に

秋の調べや残るらん ありがたや御身心素直なるにより この

壺に泉を湛え只今返し与うるなり 世もつきじ 世もつきじ 萬代までの竹

の葉の酒 汲めども尽きず 飲めども変わらぬ秋の夜の盃

影も傾く 入江に枯れ立つ足元は よろよると 酔いに伏したる枕の夢の 醒むる

と思へば泉はそのまま 盡きせぬ宿こそめでたけれ

※「次第次第に富貴の身となりて候」の部

分を声に出して稽古してみる。

こういうことをしていただいたのは、日本では音楽というものは「聴く」ものではなく、音楽芸術の鑑賞とは「稽古して習う」ものだということを実感してもらったためだ。そうでないと深い味わいはわからないのだ。

すでに亡くなられたが、私の尊敬する哲学者で、『精神と音楽の交響』という素晴らしい著書もある今道友信先生が、ある雑誌に「二十一世紀のリーダーの条件」を十いくつか挙げられていた。私は自分に関係のあること一つしか覚えていないが、それは「崇高な芸術に常に触れていること」というものだった。確かにひと昔前の経営者の方々には、こういうことを実行されていた方が多かったように思う。私が一緒に舞台に立たせていただいた方の中では、出光佐三さん（出光興産創始者）は『猩猩』が大好きだったことをよく覚えている。つまり体験されているうちに、そうなられたのだという感が残る。

音楽は教養人の無意識の部分を作る

最近になって、また『世界のエリートはなぜ「美意識」を鍛えるのか?』（山口周著・光文社新書刊）、『ハーバード大学は「音楽」で人を育てる』（菅野恵理子著・アルテスパブリッシング刊）などという本が出てきているが、これは日本では昔から行われてきたことだ。

驚くべきことに、一中節も十八世紀初頭

には稽古する人が日本中にあふれ、江戸では一中節の稽古本がない家は一軒もなかったといわれるくらい人気だったそうである。もともとはそういう歴史を持つが、段々と時代感覚から離れていき、十九世紀の文政年間に入ると、地味だということで歌舞伎の伴奏音楽としての役割も外され、時代の潮流と合わなくなってしまう。そうなると逆に、時代の流行に眉を顰めるような人、たとえば大店の主人たちに好まれるようなコンサバティブな曲調にして、それが今の私まで繋がってきたのだと思う。

一中節は初代都一中が一七〇九年に始めて以来、三百年以上の歴史があり、この時代に、ヨーロッパではヴェルサイユ宮殿が造られていた。先行する浄瑠璃の長所を取入れ、当時勃興してきた義太夫とは逆に、温雅で叙情的な表現を目指したところに特色がある。また初代都一中が生まれた一六五〇年は、デカルトが亡くなった年、一中が亡くなった一七二四年はカントが生まれた年……と、ちょうどデカルトとカントの間を生きた人であった。

一中節を稽古すると、そのイノベーションは思いがけない発想、誰もしないようなところでもない発想ができるようになる。だからそこには「想定外」ということはない。ブルースカイ・アイデア(空と同じように無限

の広がりを持つもの)がどんどん湧くような感性が鍛えられる。そして教養人になれる。

教養のあるなしの定義はまちまちだが、一中節的に言うとは、音楽を体験することは、潜在意識の中に何とも言えないことが入ること、なかなか言葉に置き換えることは難しい。仏教用語で言えば言語道断の境地なのだが、言葉に出せない何かが蓄積する、それによって人間としての感覚ができてくる、その教養人としての感覚は、無意識に行動することと自分を幸せにし、他人も幸せにすることに繋がっていく。無意識に人を幸せにして、自分も幸せになる行動をとってしまう人が教養のある人で、無意識の部分を作るのが音楽なのだ。

これによって、自ずから「富貴」の身になれると思うが、これからのAIの時代には不可欠だと思う。好意と善意だけの社会でAIを使わないと、いずれはAIにしまっぺ返しを受けると思う。今後AIが進化すると、人間は何もしなくてもよくなる時代が来るかもしれない。そうやって、時間とおカネを際限なく与えるから、何でも好きなことをしていいよ、と言われたとして、私たちは何をやるだろうか？ これで人格と教養が試されることになるのではないか……。自分を幸せにする行動ができない人は、目先の快楽に溺れて不幸になるかもしれない。

音楽はまず自分が出すべき理想的な音(声)を思い浮かべられないと、その音(声)は絶対に出せない。明確にそれを覚え、会得するための訓練が日々の稽古である。まず数秒先のような近未来から想定を始め、確実に実現していく……。そして明日、一年後、五年後、いつまでも常に理想を実現するために、稽古が大切だということだ。

【講師略歴】

一中節宗家十二世都一中

(みやこいつちゅう)

本名・藤堂誠一郎

- ・一九五二年 東京生まれ、六歳より父親の常磐津子之助に浄瑠璃と三味線の指導を受ける
- ・一九七一年 東京藝術大学邦楽科に入学、一年後に中退
- ・一九七五年 十一世都一中に師事
- ・一九八一年 二世常磐津文字蔵襲名
- ・一九九一年 二世都一中を襲名、一中節宗家継承
- ・一九九九年 重要無形文化財一中節(総合指定)保持者認定
- ・二〇一五年 日本芸術院賞受賞。古典の中の古典といわれる一中節の高度に洗練された美意識を継承し、門弟の指導にあたりながら、現代の最先端の感性の要求に答える演奏活動を国内外で展開。未来へ向かっての日本の音楽芸術の進むべき道を追求している。

◆新入会員の紹介

前会までの理事会で承認され、入会された方を紹介します。(敬称略・到着順)



松川 徹
まつかわ とおる

昭和六十二年・経営学部卒
日野自動車(株)・常務役員
東京都日野市在住



寺本 裕明
てらもと ひろあき

昭和五十八年・文学部卒
ライフフーズ(株)
取締役執行役員営業本部長
埼玉県さいたま市在住



水谷 浩
みずたに ひろし

昭和六十年・政経学部卒
大洋工業(株)
執行役員経理部長
和歌山県和歌山市在住



小井戸 亮文
こいへ と あきふみ

平成三年・政経学部卒
SOS(株)・常務取締役
東京都新宿区在住

◆明大ニュース

●「第二十二回ホームカミングデー」を開催

年に一度、校友やその家族を母校に迎える「第二十二回ホームカミングデー」が十月二十七日、駿河台キャンパスで開催された。四千人を超える校友やその家族らが集い、懐かしい旧友や恩師との再会、学生との交流など晴れやかな秋の一日を満喫した。

アカデミーホールで挙行された開会式は、フリーアナウンサーの吉澤美菜氏(二〇一一年政経卒)の司会で進行。小林和司運営委員長(政治経済学部教授)の開式の辞に続き、主宰者の柳谷孝理事長は、「母校へおかけりなさい」と歓迎の意を示すとともに、二〇二一年に迎える創立一四〇周年について、記念式典・祝賀会の開催や、明治大学創立一四〇周年記念事業募金などの取り組みを紹介。「人類の平和と発展に貢献する人材を社会へ送り出すため、教育・研究環境の充実に取り組んでいきたい」と熱く語りかけた。さらに、大雨などの大規模自然災害で被災した人を対象とする入学検定料免除などの特別措置を決定したことを報告した。

ほとど社会的評価が高まっている。校歌にもある不変の建学の精神のもとに教育・研究を行っている明治大学をぜひ支えていただきたい」とメッセージを送った。

来賓の北野大校友会長は「各地域で支部活動や後輩学生の就職支援など、校友会に参加して、世代を超えた母校への支援をしていただきたい」と呼びかけた。

その後、卒業後60・50・40・30・20・10年にあたる特別招待校友をそれぞれ代表し、▽(株)ナガホリのファウンダー会長で、二〇〇八年から明治大学理事長を務めた長堀守弘氏(一九五九年度卒)▽音楽家の宇崎竜童氏(一九六九年度卒)▽声優・マルチクリエイターの三ツ矢雄二氏(一九七九年度卒)▽オリコン(株)代表取締役社長の小池恒氏(一九八九年法卒)▽千葉県議会議員でアナウンサーの鈴木ひろ子氏(一九九九年文卒)▽東芝ラグビー部ブレイブパスの山本紘史氏(二〇〇九年政経卒)の六氏が、在学中の思い出や現在の仕事、母校への思いなどを語った。宇崎氏は自身が作曲し、夫人の阿木燿子氏(二〇〇八年特別卒業認定)が作詞した楽曲「さよならの向う側」など二曲をギターの弾き語りで披露した。最後は、参加者全員で肩を組み校歌を三番まで斉唱。蟹瀬誠一副運営委員長(国際日本学部教授)が閉会の辞を述べ、盛況の中、開会式が終了した。

開会式の後には、講演会や学生らによるパフォーマンスなど多数のプログラムを開催。恒例のマンドリン倶楽部コンサートや物産展、子供向け「キッズワークショップ」も多くの人が楽しんだ。

● やつさいー！ もつさいー！ おつさい！！

来たいよ総の国

第五十五回「全国校友千葉大会」を開催

明治大学校友会は十月五日・六日の二日間、「やつさい！ もつさいー！ おつさい！！ 来たいよ総の国 明治はひとつ 第五十五回全国校友千葉大会」を開催した。五日は東京ベイ舞浜ホテルクラブリゾート（浦安市）で前夜祭が、六日には幕張メッセ（千葉市）で記念式典が催され、日本全国と海外支部から約千六百人の校友が参集した。

式典は、落語研究会出身でタレントの渡辺正行氏（一九七八年経営卒）、TBSアナウンサーの高畑百合子氏（二〇〇三年法卒）の校友二人が司会を務めた。林威樹大会実行委員会事務局長（校友会千葉県東部支部）による開会宣言と、小関道生大会実行委員長（校友会千葉県東部支部）によるあいさつで幕を開けた。

大会会長の北野大校友会会長は、今回の校友大会が千葉県東部支部と西部支部の共催であることに触れ、関係者への謝意とともに、

「まさに『明治はひとつ』の一例だ」と力説し、校友同士のさらなる結束を呼びかけた。

続いて、柳谷孝理事長と土屋恵一郎学長が祝辞に立った。柳谷理事長は、千葉県出身の校友の一人として、付属明治中学の初代校長で、長年にわたって明治大学総長を務めた鶴澤總明氏を紹介。創立一四〇周年事業の中で鶴澤氏の功績や精神を次代に継承できるような取り組みを行う考えを示した。土屋学長は、「明治大学の現在の隆盛は、過去のさまざまな大学関係者や校友の熱意のおかげ」とした上で、「皆さんと一緒に明治大学の未来に向かって『前へ』進んでいきたい」と熱く語りかけた。

来賓の熊谷俊人千葉市長、須藤政弘連合父母会長からの祝辞、さらに森田健作千葉県知事からのビデオメッセージの後、香川県支部の玉越浩達支部長が登壇。来年九月五日・六日に開催される、「第五十六回全国校友香川大会」をPRした。最後は、明大ならびに校友会の発展を祈念して万歳三唱。記念式典は幕を閉じた。

休憩を挟んで行われた記念講演では、「廃線危機を救ったいすみ鉄道前社長直伝『考え抜く力』〜危機を乗り越える夢と戦略〜」と題して、えちごトキめき鉄道代表取締役社長で、いすみ鉄道前代表取締役社長の鳥塚亮氏（一九八五年商卒）が登壇。鳥塚氏は、

千葉県のローカル線「いすみ鉄道」の社長公募に応募し、百二十三人の中から代表取締役社長に就任。ユニークな施策を数多く手がけ、現在の観光列車ブームの礎を築いた。鳥塚氏のユーモアあふれる話しぶりに万雷の拍手が起こった。

会場をホテルニューオータニ幕張に移して行われた懇親会では、渡辺氏、高畑氏が引き続き司会を務め、役職者らによる鏡開きや、地元の高校生によるダンスパフォーマンスをはじめ、マンドリン倶楽部、歌手の竹島宏氏（二〇〇二年経営卒）らが登場しさまざまなアトラクションで参加校友をもてなした。

今回、会場となった千葉県は、九月の「令和元年台風第15号」で大きな被害を受け、予定していた内容が一部変更となるような状況での大会開催となった。懇親会の最後には、応援団による指揮のもと全参加校友が肩を組んで校歌を斉唱。さらに、「フレフレ明治」「フレフレ千葉」とエールを送り、盛り上がりの中、閉会となった。

● 「グローバル化する世界とアフリカ

—SDGsの達成に向けて—

ノーベル経済学賞・シヨセフ・ステイグリッツ教

授を招き講演会

情報コミュニケーション学部は、八月二十七日、駿河台キャンパス・アカデミーホー

ルにて、講演会「グローバル化する世界とアフリカーSDGsの達成に向けて」を開催した。これは、八月二十八日から三十日にかけて神奈川県横浜市で行われた第七回アフリカ開発会議（TICAD7）のプレ・イベントとして開催されたもので、ノーベル経済学賞受賞経験者のコロンビア大学のジョセフ・ステイグリッツ教授を招いて行われた。

約五百人の聴衆を前に、情報コミュニケーション学部四年のディステイー・ンセンギンバさんが司会を務め開会。土屋恵一郎学長があいさつに立ち、「経済成長に伴う環境や気候変動などの問題をどのように解決していくかが重要。アフリカに関する議論を通じて日本の向かうべき方向を考える機会にできれば」と述べた。

ステイグリッツ教授の基調講演では、アフリカの開発や経済成長についてさまざまな角度から論じられた。先進国と途上国間の差を埋めるためには、雇用を新たに生むようなイノベーションとラーニング（生産性を向上させるための学習）が必要であり、それらが経済発展の源泉であるとの見解を示した。

続くパネルディスカッションでは、世界銀行のハフェズ・ガナムアフリカ地域担当副総裁とコロンビア大学のアクバル・ノーマン教授をパネリストに迎え、JICA研究所の役員でもある島田剛情報コミュニケーション

ン学部准教授がモデレーターとして登壇。

ガナム副総裁は、膨大な天然資源を持つアフリカについてポジティブな見解を示し、課題である雇用の創出や汚職の根絶にはテクノロジーが大きな貢献を果たせると論じると、ノーマン教授は、学習・産業・技術の一体化政策が、持続可能な成長をもたらす構造転換を起こさざらうと期待を込めた。

最後に、情報コミュニケーション学部の大黒岳彦学部長が閉会のあいさつを述べ、講演会は終了した。

講演会の前後には、ステイグリッツ教授と土屋学長との懇談や、島田ゼミナールの学生との意見交換の場が設けられた。終了後、ステイグリッツ教授は学生との意見交換について、「質問が面白く、感銘を受けた」と印象を語った。

● 国家公務員総合職試験

合格者十人に報奨金を授与

国家試験指導センター行政研究所（所長：西川伸一政治経済学部教授）は十月二十三日、二〇一九年度国家公務員総合職試験に最終合格した同研究所所属学生十人への報奨金授与式を、駿河台キャンパス・岸本辰雄ホールで執り行った。

式典の冒頭、あいさつに立った西川所長は『大学生の品格』（著：岡部光明氏、日本

評論社）から、大学生が「ゆるぎない生活態度」を修得するためのメッセージとして「時—すべてのことに時がある」「夢—夢を持って—能力が高まる」「着実—千里の道も一歩から始まる」の三つを引用し、合格者らの今後の人生にエールを送った。続く土屋恵一郎学長は、孫文の「天下為公（天下は公のため）」という言葉から、「天下は公のため、という言葉は本学の建学の精神である『権利自由、独立自治』と響きあっていると思う。権利と自由を守り、人間の独立したあり方や自治の力を認めたくえで公務員としての仕事を全うしてほしい」と合格者の今後の活躍に期待を込めた。

合格者を代表して謝辞を述べた武藤有史さん（法4、衆議院事務局内定）は行政研究所をはじめ関係者への感謝を述べたうえで、「公務の世界において、多くの明治大学の諸先輩方が活躍している。我々も明治大学の名に恥じぬよう精進・努力していきたい」と決意を述べた。

● リバティアアカデミー

二〇周年記念公開講座

「国宝・『漢委奴國王』金印真贋論争を— 終結する！—」

明治大学の生涯学習機関リバティアカデミーは、十月五日、二〇一九年秋期公開講座

「国宝・『漢委奴國王』金印真贋論争を終結する！」を開催した。これは、リバティアアカデミー二〇周年を記念したオープン講座第一弾で、今回は江戸時代以来贋作説がある国宝・漢委奴國王金印について石川日出志文学部教授がその論争について講義を行った。

講座の冒頭では、リバティアアカデミー長の
大友純商学部教授、およびリバティアアカデミー創設から講座を担当した大塚初重名誉教授が二十年間を振り返った。大塚名誉教授は、「学問や研究は止まることなく日々変化
して、だからこそ最先端で努力し続けることを忘れてはならない。そういった中で今まで多くの方が本学に来て、われわれの研究
成果を聞いてくださったことは大変感動的でありがたいこと」と、自らの学問観とこれま
での受講生に感謝の意を述べた。

続く講演では、石川教授が登壇し、国宝・漢委奴國王金印について、これまでの論争の経緯と現在の見解について解説した。石川教授は、「今日は漢委奴國王金印が本物である根拠をいくつも提示しますが、疑いながら聞いてください。そして本物か偽物なのか、ぜひご自身で判断ください」と客席に投げかけながら、スライドを約八十枚使用し金印が本物であるということを尺度、金属組成、鈕形、字形の観点から結論付けた。定員八百名の会場は満席となり、ユーモアを交えた石川

教授の解説に受講者は大いに沸き立った。

●ジェンダーセンター

開設一〇周年記念シンポジウム

『ジェンダー研究の新展開』

情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター(センター長 田中洋美情報コミュニケーション学部准教授)は、九月二十日、駿河台キャンパス・グローバルフロントにて、シンポジウム「ジェンダー研究の新展開―この十年と今後」を開催した。

これは、ジェンダーセンターの開設一〇周年を記念した二回のシンポジウム「二十世紀の多様性と創造性―学術・アート・ファッションにおける新展開」の一回目で、多様性に関する学術的な議論をリードしてきたジェンダー研究を論じることを目的として催されたもの。ジェンダー研究に関心を持つ研究者や学部、大学院生など約百十五人が参加。

センター長の田中准教授と、運営委員の高峰修政治経済学部教授が司会を務めた。冒頭、大黒岳彦情報コミュニケーション学部長と須田努大学院情報コミュニケーション研究科長が登壇し、「センターは、いまや学域横断的な研究領域を拓ける研究機関に成長した」(大黒学部長)、「センターとは協力関係を築き上げてきた。今後のジェンダー研究をけん引する機関として期待している」とあいさつした。

続いて、横浜国立大学の江原由美子教授とドイツ・ルール大学のイルゼ・レンツ名誉教授による基調講演。江原教授は「日本における近年のジェンダー研究の展開―非正規化と多様化の中で」と題して、これまでとこれからのジェンダー研究を論じた。レンツ名誉教授は「ジェンダー研究の新展開―フェミニズム、多様性、プロセス的インターセクシオナリティ」と題して、フェミニズムの現状分析やインターセクシオナリティ(差別の構造は多層的で交差しているという考え方)などについて解説した。

後半は、パネルセッション「ジェンダー研究の新展開」が行われ、藤本由香里国際日本学部教授や、兼子歩政治経済学部専任講師ら五人が登壇した。それぞれが専門とする研究領域から発表を行い、ジェンダー研究をめぐる幅広い視点や考え方を提示した。

●タイガー・ウッズ氏が来校

プロゴルファーのタイガー・ウッズ氏が、十月二十日、明治大学和泉キャンパスを訪れ、体育会ゴルフ部(女子部)らとの交流イベントが催された。これは、ウッズ氏が、十月二十四日から始まるZOZOチャンピオンシップに出場するため来日し、NIKE HARRAJUKU(東京都渋谷区)など都内数カ所で行われた来日記念イベントの一環と

して行われたもの。

和泉キャンパスに設置されているゴルフレンジにて、体育会、ゴルフ部員やその他の部の学生、招待された付属中野中学・高等学校のゴルフ部員など約二百三十人が出迎える中、ウッズ氏が登場。ウッズ氏は、普段ゴルフ部が使用している打席に立ち、およそ十球にわたるデモンストレーションを披露。快音を響かせると、会場からは大きなよめきと喝采が起こった。

さらに、ウッズ氏によるゴルフ部員へのレクチャーが行われ、部員らのスイングを真剣に見つめたウッズ氏は、「試合でピンを狙うように、練習の際も一球ごとに、何かをしようという目標を持って取り組むことが重要」とアドバイス。ゴルフ部員との的当てゲームや、アスリートのためのメンタルトーク、学生との質疑応答なども行われ、最後にはウッズ氏による参加者全員との「セルフィー」集合写真が撮影された。

学生らは世界トップレベルの選手との交流に終始目を輝かせ、大歓声の「タイガー」コールの中、ウッズ氏の来校イベントは幕を閉じた。

●プロ野球ドラフト会議

硬式野球部の森下主将・伊勢投手に指名

プロ野球ドラフト会議が十月十七日、東

京都内で行われ、体育会硬式野球部の主将・森下暢仁投手（政経4）が広島東洋カープから一位指名、伊勢大夢投手（経営4）が横浜DeNAベイスターズから三位指名を受けた。

駿河台キャンパス・アカデミーコモンに設けられた特設会場では、硬式野球部の井上崇通部長（商学部教授）、善波達也監督ら部関係者と硬式野球部員が一堂に会して、ドラフト会議の中継を見守った。森下主将が一位指名、伊勢投手が三位指名を受けると、部員らから歓声が上がリ、緊張の面持ちだった両選手から笑顔がこぼれた。

両選手と井上部長、善波監督は記者会見に臨み、「大学に通わせてくれた両親や、野球のこともそれ以外のことも指導していただいた善波監督、先輩方や仲間たちに良い報告ができてうれしい。先発投手として活躍し、ファンの皆さんに勇気を与えられるような選手になりたい」（森下主将）、「野球部の四年間を通して、チームで一丸となって優勝のために頑張ることを学んだ。その感覚をプロの世界でも生かして、一年目からチームのために活躍できる選手になりたい」（伊勢投手）と、それぞれ指名の喜びとプロ入り後の抱負を語った。

会見後、硬式野球部員らは胴上げで祝福。仲間たちからの熱い激励に、両選手は喜びを噛みしめている様子だった。

●明大スポーツ新聞部

「校歌プロジェクト」土屋学長にプレゼン

明大スポーツ新聞部が明治大学校歌の素晴らしさを明大生に伝えることを目的にホームページで掲載している特集記事「おお明治―僕らの校歌プロジェクト」。その一環として十月八日、土屋恵一郎学長にプロジェクトの進捗状況をプレゼンテーションした。同部は五月に「学生にとって『校歌』とは何か」をテーマに土屋学長にインタビュー取材を実施しており、今回はそれに続く形で新たな企画を提示した。

プレゼンテーションには明大スポーツ新聞部のほか、マンドリン倶楽部、応援団バトン・チアリーディング部、ハーモニカソサエティ、コピーダンスサークルCopiaの学生と大学の関係部署の部長四人が参加した。

校歌誕生一〇〇年の節目である二〇二〇年から、校歌が初めて公の場で歌われた十月二十八日を「校歌の日」と制定することや、明大生に対して校歌を広めムーヴメントをつくるための施策を発表した。

土屋学長はプレゼンテーションのフィードバックとして、「明治大学のブランド力が確立しているにも関わらず校歌を歌わないのはなぜか、という問題意識で戦略を練ることが前提条件ではないか」と指摘。その上で、「校歌の価値として、卒業後の社会のネット

ワークを意識し、世界の舞台上で活躍する校友五十六万人とつながる『わたしのIDカードは明治大学校歌』という視点もあるのではないかとアドバイスした。

● 体育会応援団

東京二〇二〇公式応援イベントに出演

体育会応援団は九月六日、駿河台キャンパス・リバティタワーにて行われた東京二〇二〇大会の応援プロジェクトTOKYO2020「Make The Beat」の発表イベントに出演した。イベントには、応援団バトン・チャリディング部出身で二〇一九ミス・ジャパングランプリの土屋炎伽さん（二〇一五年国際日本学部卒）も登場。

これは、東京二〇二〇組織委員会が企画したもので、二〇二〇年に開催される東京二〇二〇大会の会場において、世界各国から来場した観客全員が心一つにし、さらにソーシャルメディアを活用することで、会場の外からでも、世界中同じ応援ビートを奏でて出場選手を応援し、大会に参加することができるという応援プロジェクト。日本の代表的な応援のリズムである「三三七拍子」が明治大学応援団発祥であることから、このたび応援団が発表イベントに参加することとなった。

イベントでは、東京二〇二〇マスコットのミライトワ、ソメイティとともに「二〇二〇

〇ビート」を実演。団長の浜浦良さん（経営4）は、「応援の楽しさを全世界に発信したい」と述べ、世界に向けて三三七拍子のコツを説明しつつ「皆さんの手による優しいリズムで会場を包み込んでほしい」と語った。

● 体育会拳法部

木村選手が全日本学生選手権で優勝

十月二十日に名古屋で行われた第三十五回全日本学生拳法個人選手権大会で、体育会拳法部の木村柊也選手（文1）が優勝、小森彪楽選手（文3）と深町雅也選手（法2）がそれぞれ三位を獲得し、男子ベスト4のうち三名が本学選手となった。木村柊也選手は九月に行われた第五十九回全日本拳法個人選手権大会に続いての個人戦優勝（大学1年生での優勝は、史上二人目の快挙）となり、今年度出場した個人戦を総なめする偉業を成し遂げた。

● 体育会競走部

二年連続六十一回目の箱根駅伝出場

二〇二〇年一月二日～三日に開催される第九十六回東京箱根間往復大学駅伝競走（箱根駅伝）への出場校を決める予選会（東京都・陸上自衛隊立川駐屯地・立川市街地・国営昭和記念公園）が十月二十六日、十校の出場枠をかけて行われ、明治大学体育会競走部は四

位で箱根駅伝本戦への出場権を獲得した。

参加校四十三校、五百六人の選手が参加した今回は、気温が高くハードなレースとなった。各大学の外国人留学生選手が先頭集団を形成する中、レース序盤には手嶋杏丞選手（情コミ2）が日本人選手の先頭に立ちレースをけん引するなど活躍。十時間五十一分四十二秒という結果で予選通過を果たした。

山本佑樹駅伝監督は、応援に駆け付けた父母会・校友会について「日ごろからの応援に本当に感謝している」と述べるとともに、「全日本大学駅伝と、箱根シード権獲得に向けて準備したい。選手も力をつけてきている」と意気込みを見せた。

● 明治大学博物館

植村直己がイノチかけてつかんだコトバ

植村直己が厳しい冒険でいつも繰り返した言葉。たった一人で向かった世界の高峰、極寒の地……。未知の場所で困難に遭い、乗り越えてきた中で残した言葉は尊く、今もなお私たちに「生きる力」を与えてくれます。その言葉に、イラストレーターの黒田征太郎さんがイラストにより新たな「イノチ」を吹き込みました。

主催…豊岡市立植村直己冒険館

共催…明治大学校友会

後援…明治大学博物館・社会連携機構



入場料…無料

会期…二〇一九年十一月七日〜十二月十七日

会期中無休

会場…明治大学博物館 特別展示室(駿河台

キャンパス・アカデミーコモン地階)

◆駿台トピックス

●秋の親睦バス旅行を催行

十月十九日、会員の親睦の一環として総務・事業委員会が企画運営した「小田原・大磯の歴史的建造物見学&名料亭で昼食を楽しむ」バスツアーが開催、出発時は小雨模様でしたが、二十八名が参加して和気藹々とした

雰囲気です。紫紺館前を出発しました。

まず小田原にある松永安左エ門(耳庵)の電力王と称された松永安左エ門(耳庵)の居宅「老櫻荘」や実業家・野崎廣太(幻庵)による茶室「葉雨庵」などの国登録有形文化財を見学、続いて大磯に移動して、澤田美喜記念館で戦前戦後四十年にわたって収集された、貴重な江戸時代の隠れキリシタンの遺品や関連する品々を鑑賞しました。

昼食は、大磯駅前にある、伊藤博文公から屋号を拝領した創業明治三十六年の名料亭「松月」にて懐石料理を、美味しい日本酒も堪能しながら、会話も弾みました。

その後、地元のボランティアガイドさんの案内で、旧吉田茂邸を見学、ここは吉田茂が暮らした当時の邸宅を復原したもので、昭和二十二年頃建てられた応接間棟、三十年代に近代数寄屋建築で有名な吉田五十八が設計した新館をメインに再建されています。

帰り道では、ワインを片手にカラオケ大会で盛り上がるなか、あつという間に帰京、充実した楽しい一日となりました。

●ラグビー明慶戦観戦に四十人参加

十一月十日、今年一月に二十二年ぶり十三回目の大学日本一の座に輝き、連覇を狙うラグビー部の対慶應戦を会員四十名で観戦、好評につき昨年に続く開催となりました。



試合は先制こそ許したものの、前半十七分にはトライを決め逆転。その後もトライを重ね(前半・後半とも3トライ)、40対3という大差で快勝し、ここ二年続けて負けている雪辱を果たしました。試合終了後はラグビー部OBの猪瀬さん経営される「モンキー」にて懇親会を開催。昨年とは違って美酒に酔いしれ、盛り上がった楽しい会となりました。

明慶戦の後の行なわれた第二試合では早稲田が帝京を破り、五戦全勝同士となった明治と早稲田、まずは対抗戦グループ八連覇中の帝京戦、そして十二月一日の早稲田戦に大いに期待したいところです。



明治大学の将来を支援するOBの経済人、法曹人、文化人が集う「連合駿台会」

「連合駿台会」は、1953年に設立された「茗水クラブ」と、1964年に設立された「明友クラブ」が2002年に統合して設立された、経済、法曹、文化など各界から集うOB組織です。「連合駿台会」は、次代をリードする会員が結集し、相互に補完し合いながら明治大学に貢献してまいります。

連合駿台会会長 田村 駿 (1965年商学部卒)



今後のスケジュール

- 11月10日(日) ラグビー明慶戦観戦・懇親会
- 11月20日(水) 11月(忘年)例会「宇崎竜童 弾き語りライブ2019」
- 11月28日(木) 第16回連合駿台会ゴルフ会 場所：東京ゴルフ倶楽部
- 12月 3日(火) 正副会長会 場所：日本工業倶楽部
- 1月22日(水) 連合駿台会学術賞・学術奨励賞授賞式、駿台懇話会



2019.10.19バス旅行

資料のご請求はこちらまで

連合駿台会事務局

TEL : 03-3296-4747 FAX : 03-3296-4748 ホームページ : <http://www.rengosundaikai.jp>
Email : rengosundaikai@silk.ocn.ne.jp

★明治大学広報(11月1日号)に掲載された大学への支援広告。今後2ヵ月に1回掲載していく予定です。

◆九月例会出席者

- 青木幹則、青柳勝榮、浅井宏、安達明正、阿部倫明、有賀隆治、池田一義、池田勝也、石川かおり、石橋良一、市川治彦、伊東正博、井上欽也、猪田忠、伊原敏雄、今村健、岩永省一、上西紘治、潮田伊佐夫、内川雄一郎、梅津章、浦川竜哉、江崎徹、大野正美、大原幸男、大前実之、大村託現、大屋政則、尾暮敏範、鬼塚和也、狩野省市、栢森靖、河合陽一郎、河村博、神林光、木下唯志、草木頼幸、小濱雅説、小山修、根田吉雄、齋藤柳光、坂田英夫、笹田学、佐藤和正、佐藤仁、佐野公哉、佐野径、杉浦伸二、鈴木隆志、関根均、相臺志浩、高澤徹、田口幸隆、武田宣夫、田中等、谷原誠、田村駿、樽見俊之、辻井知明、当山明彦、富水流孝二、中川敏洋、長堀守弘、中村豊、並木洋一、二井康夫、西澤豊、西山武夫、萩原裕次、長谷川進一、畠中君代、塙英幸、羽生健一郎、馬場範夫、疋田邦雄、日高憲三、平川清、平田静子、深代尚夫、福田和彦、藤巻伴英、古本英樹、前川一郎、眞壁八郎、榎野泰、松崎優子、摩尼和夫、丸山雄平、三浦栄治、宮入知喜、宮下隆、宮本浩二、向井真一、向殿政男、村岡健、室井恵明、柳谷孝、山上雅隆、山口大介、山口政廣、山田晃久、山田憲典、山田朝彦、山端康幸、弓野理恵、渡邊一治、渡邊建三

【編集後記】

今年の秋は、四年に一度のラグビーワールドカップが日本で初開催され、オリンピックや、FIFAワールドカップと並ぶ三大スポーツの祭典として大いに盛り上がりを見せました。

連日特番が組まれ、日本中の期待が集まる中、優勝は南アフリカに譲ったものの、日本代表は、当初の予想を上回る初のベスト8と快進撃を見せました。

にわかファンの私は、テレビ観戦となってしまうでしたが、思い返しても名シーンばかり、トライの度に鳥肌が立ち、瞳はウルウルを繰り返し、興奮冷めやらぬ思いでした。

台風で中止となった三試合を除いた四十五試合で観客動員数は百七十万、テレビの視聴率はベスト8入りを決めたスコットランド戦(日本テレビ)で三九・二%、準々決勝の南アフリカ戦(NHK)で四一・六%と日本中の約四割の方が日本代表の試合を観ていたことになりました。

また、開催前より経済効果についても注目されていきました。来日外国人の数は四十万人と言われており、宿泊・移動・滞在による消費等、ワールドカップによる経済効果は四千三百億円以上と言われています。

テレビで、ラグビーファンはビール好きが多いというニュースを見ましたが、バーや町中で浴びるようにビールを消費する外国人の姿を紹介。ハイネケンでは前年比三・四倍の消費量があったと聞きその量に驚きました。

先頃、二〇一九流行語大賞のインターネット語30語が発表され、「ジャッカル」にわかファン「四年に一度じゃない。一生に一度だ。」「笑わない男」「ONETEAM」など、ラグビーに関する五つもの言葉がノミネートされ、注目の高さを感じました。

二〇二〇年東京オリンピックでは、さらなる注目を浴びるでしょう。期待に胸は膨らむばかりです。がんばれニッポン!

(根田 吉雄)